

あなたは死を宣告されたことはありますか？ 2003年10月21日、札幌市南1条病院、現在の南3条病院の診察室で医師から告げられた。

「現在のこの状況は5年で50%、10年で10%です」

私は突然の訳のわからない数字に理解ができなかった。私は担当医に聞いた。

「先生、どういう意味ですか？」

担当医は私から視線をずらして、モニターに映りだされた画像を見ながら答えた。

「生存率です」

02年11月に中国広東省で急速に呼吸障害を示すSARSなるものが発症し、翌03年7月までに32カ国で死者数774名にのぼったが、日本では発病例がなかったとされる。タイミングはドンピシャだった。そのような状況でも私は、当時の多くの日本人と同じく「俺には関係ないな」と思った。

アメリカ滞在中に発症!?

03年2月5日、世は札幌の雪まつりで大盛り上がりのなか、私は成田からデルタでロサンゼルスに到着した。その後、ラスベガスに向かい、MGMGランドで食事をした。同行したのは、家族と農家のオヤジたちで、大不況政策によって作られた

フーバーダムの水力を使ったネオン輝く偽りの時間を楽しんだ。

その後、11人乗りの大型バンを4時間運転して、カリフォルニアのジョシユアツリーという町を目指した。そこには子供たちがグランプ、グランマと呼ぶ日系2世が住んでいた。町といっても郊外で、周りは砂漠だ。風邪が強いと西部劇でおなじみのオカヒジキ属ヒユ科の植物がコロコロ回るタンブルウィードを見ることができワイルド満載の土地だ。

2月24日の帰国前日に軽い頭痛があったので、今では日本でも販売している頭痛の特効薬タイレノールを飲んだ。夜はロサンゼルス

空港のすぐそばにあつて当時は大陸系がほとんどいなかったクラウンプラザでパスタを食べた。念のため就寝前にもタイレノールを飲んだ。

翌25日の朝に軽い頭痛は残ったが、咳はなかったので成田行きの飛行機に乗り込んだ。一回目の食事あたりから再び頭痛が来たのでやはりタイレノールを飲んだ。1時間ほど

死の宣告をされたことがありますか？

Vol.142



宮井 能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作物する。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

すると、今度は悪寒が始まった。同じ薬ばかりはマズイと思い、アドビル（イブ錠剤）を飲んだが治らない。こうなると、後は寝るだけで、シートをできるだけフラットにしてブランケットを被り寝た。

ときどき目を覚ますが起き上がれない。これはもう金髪・ブルーアイのおばちゃんキャンピングアテンダントに恥を忍んで頼むしかないと腹をくくった。肩に担

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

いでもらって降りるわけにもいかなので、車いすを頼むことにした。あまり早くから頼むと困ると思い、到着の30分前に元綺麗だったおばちゃんキャビンアテンダントに声をかけた。

機体がスポットに着くと最初に出るのはもちろん私だ。熱はないので検査は問題なくパス。入国は秘密の通路でやってくれた。その間、機内から私を引き継いだ成田のデルタ職員が見守ってくれた。ただ荷物も引き取り到着出口に着くと「では、さようなら」の雰囲気があったので、「医務室まで送ってください」とお願いした。「ほら、すぐそこですから」と言われ完璧放置プレー状態。なんと車いすのホイールを回すのに力が必要だったことか。

医務室に辿りつくまでに不思議なことが続いた。通行する人たちとすれ違う時に完璧に「アッ、ぶつかる」「ドーン」という場面が数回あった。どう考えてもわざととしか考えられない行為に思えた。あと女性も、わざわざ私の目の前に来て荷物のチャックが開くのだ、開かないのだと独り言を話していたので、私が車いすから降りて手伝おうとする「アッ、直った」と言って180度回って行ってしまった。えーマジか、お前たち本当の身体障害者

にも同じようなことをしているのか?と疑ってしまった。たぶん豊かさを知らない小作人根性の持ち主の子孫たちなのだろう。

やっとの思いで医務室に着いた。受付で「保険証ありますか?」と聞かれた。今では家を出る時は持ち歩いているが、当時はまだ40代半ばで元氣モリモリ、ピンピンなので持ち歩いていなかった。当然、100%自費は仕方なかった。ダメもとで「後から保険証送ることが出来ます」と伝えたが拒否された。この辺もマイナンバーと統一するなどという話を聞くが、もっと進めて埋め込みインプラントにでもできないものだろうか。

さあ、当時日本で一番背が高い管制塔の成田国際飛行場だ。しつかり見ていただこうと思つたが、受付嬢から「先生はこれから1時間休憩になります」と、なんとも無情な答えが返って来た。仕方がないのでへトへトの体で1時間待つことになった。時折カーテンから「きゃつ、きゃつ」と笑いを我慢しているような声が漏れ聞こえてくるのだ。内容からして、どーもあのドラえもんを見て楽しんでるのだろうと思つた。それにしても笑い方に品がなく、声も若い感じがした。

1時間が過ぎ、診察が始まった。

先ほどから漏れ聞こえて来たカーテンが開かれ、出てきたのは20代後半の医師だった。あのキモイ笑い声の持ち主はお前か?

目の前に現れた時は威厳を醸し出しながら診断を始めた。その時間、1分。「風邪ですね」「えっ?薬は?」と聞いた。若い医師は「休めば治りますよ」。はい、8500円なり。ふざけんな! 東邦医大の派遣医師めがつつ。しかし、確認すると当時の成田の医務室は日本医科大学となつている。でも東邦医大だったような気がするのだが。

急遽、成田で1泊して翌日北海道に帰ることにした。自宅に帰ると何もなかったかのようにいつもの調子に戻つた。その日は2月28日で、父が立候補していた長沼町議選挙があり、その日の夜には338票を取り、当選した。やはり金の力はすごい!と思ひ知らされた。

まさかの余命宣告か

そういえば、航空身体検査は毎年受けているが、人間ドックに行ったことがなかった。SARSも気になつたので、9月3日に今はなき人間ドック専門の札幌のダイヤモンドクリニックに行った。その場で右肺に白い影があるので専門医に診てもらつたほうが良いと言われ、

当時の南1条病院を紹介された。

後からトンデモナイことになることは知らずに1カ月以上たつてから南1条病院に行った。CTを取り画像を見た○田先生は、「右上部肺に直径3cmの腫瘍のような物がありますね、現在のこの状況だと5年で50%、10年で10%です」となつたが、「とりあえず肺の生体検査をします」ということになつた。ドイツ・ハノーバーに行くことになつていたので、検査は翌月11月21日に口からゲホゲホ言いながら差し込まれた。

正式な検査結果は数日待つことになつたが、手術室の外では家族が待つていた。先生は家族に「炎症ですね。腫瘍ではありません」。もちろん家族は涙して……ということになつた。そうです。このような場合は本人よりも手術室の外で待機している家族に真実が告げられるのです。

ではあの3cmの物は何なのか? 「動物飼つてる?」と聞かれたが、「いません」と答えた。「ん〜ん、海外は?」となり、毎年アメリカに行きます。「どんなところ?」「え〜内陸の砂漠地帯です」と話したところ、○田先生は「そういえば砂漠に変わった病気があつたな」。その日はそれで終了。自宅に帰りましたね。(続く)